

## 第4回・第5回スマートサービスによるWell-beingの改善方策検討WG 議事概要

(第4回)

日時：令和6年2月9日(金) 15:00～17:00

場所：国土交通省 6階 都市局議室(WEB併用)

(第5回)

日時：令和6年2月16日(金) 13:00～15:00

場所：国土交通省11階都市局第二会議室(WEB併用)

WGの論点に対する委員からの主な意見は、以下のとおり。

### 【都市局としてのスマートシティ政策の方向性について】

- これまでのスマートシティを振り返ると、まちのビジョンをしっかりと考えて実施している事例と、技術起点で実施した事例とに二分される。スマートシティを何のためにやるのかというビジョンとストーリーが重要。
- スマートシティの目指す方向性として、「都市のビジョン」という表現を使用すると、課題が抽象化されてしまうことを懸念。全員の共通項を狙うのではなく、テーマを尖らせ具体的に狭く示すべきという見方もあるのではないか。
- 自治体だけではなく民間事業者からの提案を促すとともに、エリアが小さい地域でもイメージができるようにテーマを設定すべきではないか。
- 新たなスマートサービスの導入を目指す場合は、これまでに導入された「デジタル都市アセット」や取得したデータ活用との関連性を整理して検討すべきではないか。

### 【スマートサービス実装のゴール設定について】

- スマートサービスのマネタイズは重要ではあるが、「収益化」というイメージが強まらないように注意するとともに、短期的な視点とともに長期的視点で効果がでるような取組もあることに留意すべきではないか。
- フィジカルおよびデジタルのまちづくりの双方の窓口を自治体が設けることがよい。効果検証の観点を含めて、ゴールのイメージを特定するか、自由にゴールを設けるのか等の、最終的ゴールの考え方に関して明示すべきではないか。

### 【スマートサービスが自然と創発される仕組みについて】

- スマートシティを推進するうえでは積極的かつ長期的に参画する民間事業者とコンソーシアムを組成することが重要。地域に根を下ろしてまちづくりを担う民間事業者とスマートシティを繋げていくことが必要ではないか。

- 「実証実験」という言葉の定義を明らかにすべきではないか。応募する側からすると、実証実験から実装までの距離感が近すぎると企業がやるべき内容と捉えられてしまい、遠すぎると何を確認するかわからないと捉えられてしまうことを懸念する。
- サービスを展開していく際にプライバシーの問題等が懸念されるが、データ利活用にあたっての権利関係について将来を見据えて戦略的に調整できる体制とすべきではないか。
- 自治体内部においては、企画部門、都市計画部門、対象事業を運用する原課等が連携することで、組織横断的な体制を構築するべきではないか。

### 【スマートシティの評価のあり方について】

- Well-Being の評価方法が統一されていないと、客観的な評価や他地域の参考にしていくことが難しいのではないかと感じる。自治体単位で Well-Being の評価方法を考えることは難しいため、国でひとつのルールを決めて評価する仕組みを作った方が良いのではないかと。
- Well-Being 指標は総じて自治体単位かつ長期で統計的なデータに頼らざるを得なくなっているように感じる。Well-being の評価にあたっては、統計的な指標だけではなく、補完的に何のデータを取得し分析する必要があるかを示すべきではないかと。
- Well-Being の変化を把握する場合、事前事後の行動データを取得できると良い。また、滞在者が幸せになったと思うかという主観指標はアンケートで聞いても中庸な回答しか得られないことを懸念。少数の人をサンプリングし、事前事後でインタビューをするというような手法を開発しても良いのではないかと。

### 【効果検証について】

- 利用者一人一人の幸福度と都市のビジョンの両面を効果検証する必要がある。空間に落とした時に地区にあったものにできているのかという検証することが重要ではないか。全体を通して一貫性を持たせる、スマートサービスのゴールをはっきりさせたうえで検討を開始することが重要。
- 効果検証は答え合わせだけでなく、スマートサービスで取得したデータを他のものにも使えないかという検討をすることも含めるべきではないかと。

以上